

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2014.03) 第30号:17~25.

朱鶴齡に関する基礎的研究  
—その人物と著述活動について—

江尻 徹誠

*Ann.Rep.*  
*Asahikawa Med. Univ.*  
*Vol.30.2014*

朱鶴齡に関する基礎的研究  
—その人物と著述活動について—

A Basic Study on Zhu He-ling  
--His Character and Writings--

江尻 徹誠  
Tetsujo Ejiri

**Abstract:**

Zhu He-ling was a scholar, which succeeded in the Late Ming and the Early Qing Period. He had extensive interaction with representative scholars in that period, advanced research in the field of literature and traditional study of Five-Classics and wrote many researches.

For all that, in Japanese academic society, he is rarely introduced and thus his energetic activity and the contents of research are barely known. Therefore this writer considered trying the introduction and study on Zhu He-ling's writings.

This research is the first paper of the continuous consideration. First, this writer explains his character briefly. Then does his works such as "Shi-jing Tong-yi", "Li Yi-shan Shi-ji", "Du Gong-bu Ji Ji-zhu", Finally gets a stepping-stone toward future research.

キーワード：朱鶴齡、『詩經通義』、『詩經』、詩經學、杜詩

Key words : Zhu He-ling ; Shi-jing Tong-yi ; Shi-jing ; Study of Shi-jing ; Du-shi

---

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 e-mail:dirie@zc4.so-net.ne.jp

## はじめに

中國・明朝と清朝の過渡期である明末清初は、舊王朝から新王朝への興亡・過渡期を内包するため、政治的には激動の時期であったといえるが、それは文化の面においても同様であろう。それまである種の爛熟状態にあった中國に、異民族王朝である清朝が興り、その文化・習俗が流入したことによって、中國に生きる人々は物質的にも精神的にも、そして良くも悪くも大きな變化を強いられた時期であったといえよう。

拙稿で紹介する朱鶴齡は、この明末清初を生き抜いた學者の一人である。彼は文人としても名高いばかりではなく、中國の傳統的學問である經學についても造詣が深く、著作も数多い。また、その交友関係も幅廣く、當時を代表する様々な士人と交流を持ち、現在の學界においてもその名を知られている人物である。しかしながら、本邦ではこの朱鶴齡について紹介がなされることは少なく、在世當時の活躍や著作の内容についても決してよく知られているとは言い難い状況である。

そこで筆者は、朱鶴齡とその著作について整理を施し、彼の學問とその多様な意義について検討を試みようと考えた。拙稿は彼とその著作に関する整理の一端であるが、以降、朱鶴齡に対する研究を進行する上での最も基礎的な考察であり、ここから更に詳細な研究に發展させていくことを付言しておきたい。

### 一、朱鶴齡について

ではまず、この朱鶴齡という人物について確認していこう。『清史稿』儒林傳を紐解くと、彼について次の様な記述がみえる。

朱鶴齡、字は長孺、吳江の人。明の諸生。穎敏にして學を嗜み、嘗て杜甫・李商隱の詩に箋注し、盛んに世に行はる。鼎革の後、屏居し著述す。晨夕一編、行くに途路を識らず、坐するに寒暑を知らず。人或いは之を愚と謂ひ、遂に自ら愚庵と號す。(『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」)<sup>1</sup>

朱鶴齡はその字を長孺といい、吳江の出身であるという。彼は文學の面でその才能を發揮し、杜甫(七一二～七七〇)および李商隱(八一二～八五八)が著した詩編について注釋書をまとめ、それが當時の學界において重用されたというのである。明清の過渡期を経て、彼は著述活動に専念するようになるのだが、ひとたび思索に耽るとあまりに集中してしまうため、物思いしながら歩く姿はまるで道を知らない迷い人のようで、また腰を下ろして考え事を始めると、寒暑を忘れるぐらいに没頭したという。このような有様であるから、誰ともなく彼のことを「愚者」と呼ぶようになり、それを耳にした朱鶴齡自身、その言を是として、自らを「愚庵」と號するようになった、というのである。ここから彼の愚直なまでに眞摯な、學問に対する態度・姿勢が看取できよう。

自らが學問狂いであることを公言してはばからない朱鶴齡であったが、このように彼が學術的活動に潛心する切っ掛けをつくった人物のひとりとして、顧炎武(一六一三～一六八二)の存在が挙げられる。次の一文を参照したい。

初め文章の學を爲すも、顧炎武<sup>まじ</sup>と友はるに及び、炎武、本原<sup>つと</sup>を以て相勗むれば、乃ち經・注疏及び儒先の理學に湛思覃力す。(同上)<sup>2</sup>

朱鶴齡は元來、詩文を學ぶことを旨としていたのだが、顧炎武と友誼を結ぶに至るや、彼が本原の學、要するに中國の傳統的學術であるところの經學や、宋代以降盛んとなった理學について精力的な研究を行っていることに觸發されて、ついには自身も『五經』やそれらの注疏について學んだり、理學について研究するようになったという譯である。この顧炎武の件からも看取できるように、朱鶴齡が周圍の文人や知識人達の影響を受けながら次第にその學風を形成していったことは想像に難くない。

また、顧炎武と同様に、朱鶴齡の學問に影響を与えた人物として陳啓源（?～一六八九）が挙げられる。朱鶴齡と陳啓源の交わりについて、『清史稿』の以下の記述を参照したい。

朱子、詩の小序を掇撃すること太だ過ぐるを以て、同縣の陳啓源と諸家の説を參考し、兼ねて啓源の説を用ひ、序義を疏通し、詩經通義二十卷を撰ず。（同上）<sup>3</sup>

朱鶴齡の數ある著作のうち、『詩經通義』は、『五經』のひとつである『詩經』に關する主要な研究書である。經書のひとつであることもさりながら、文人として知られた朱鶴齡のこと、中國における最も古典的な詩集としての『詩經』に注釋を附與することにはある種特別な意味があったものと考えられるが、彼は同書を執筆するに當たって、友人である陳啓源とともに作業を進め、また自らの著作にその陳啓源の學説を積極的に採り入れたというのである。朱鶴齡の交遊関係やその著述活動の詳細については、朱鶴齡の生平を考える上で重要な問題であるため、新たに稿を準備して論述していくこととするが、これらの例示から、朱鶴齡が様々な士人・文人との交流を経ながらその學問的方向性を定めていったことが推察できよう。

## 二、生没年について

ところで、ここであらためて朱鶴齡が活躍した時期を確認するために、彼の生没年に關する記事を探してみると、先掲の『清史稿』には次の様な記述がみえる。

年七十餘にして卒す。（同上）<sup>4</sup>

同書のこの記述によれば、朱鶴齡の没年やその際の正確な年齢は不明となっている。ところが、『清史列傳』にみえる朱鶴齡の記事を確認すると、次の様に記されている。

康熙二十二年卒す、年七十八。（『清史列傳』卷六十八、「儒林傳下一」）<sup>5</sup>

『清史列傳』によると、朱鶴齡は康熙二十二年（一六八三）に没したこととなり、その際に彼は七十八歳であったという。ゆえにここから逆算すると、彼の生年は萬曆三十四年（一六〇六）ということになる。

では、何故『清史稿』は「年七十餘」とだけ述べて、『清史列傳』の記述のように朱鶴齡の没年とその年齢を明示しなかったのでしょうか。この點については、朱鶴齡による次の言葉を参照したい。

甲申の春、金陵の唐儀曹の署に館するに……、遂に志を決し、擧子の業を棄つ。時に年三十七。（『愚菴小集』附録「傳家質言」）<sup>6</sup>

この一文で留意すべきは、朱鶴齡が自ら、甲申の年に三十七歳であったと述べていることである。甲申とは、つまり崇禎十七年（明）かつ順治元年（清）であり、西暦では一六四四年である。明末と清初のまさに境界たる年であり、これを時間的な轉機として、朱鶴齡は科擧に合格することを目的とした經世的な受験の學を放棄し、より純粹な學術活動に精力を傾けることとなった、というのであるが、この年から彼が自述した年齢を用いて逆算すると、朱鶴齡の生年は萬曆三十六年（一六〇八）となることがわかる。ところがこの数字は、先述の『清史列傳』の記述に基づく朱鶴齡の生年である萬曆三十四年（一六〇六）と齟齬をきたすのである。ここから、『清史稿』が朱鶴齡没時の年齢を「年七十餘」と記したのは、恐らくはその斷定を避けてのことか、あるいは不確定の結論を提示することを嫌ったためとも愚考する。

ここで一度整理しておく、まず没年とその当時の年齢に関する記述から、萬曆三十四年～康熙二十二年（一六〇六～一六八三）という説（先述の『清史列傳』に代表される）があり、一方で朱鶴齡自身の言葉から、その生年を萬曆三十六年（一六〇八）とする説（『愚菴小集』附録「傳家質言」に依據する）があることとなる。

この問題に関して、例えば『清詩紀事初編』では、朱鶴齡「傳家質言」の記事を是とした上で、もし假に没年が康熙二十二年（一六八三）であるならば、年齢は七十六歳となることを指摘している。<sup>7</sup> また、李光筠は、朱鶴齡が『周易廣義略』に附した序文に壬戌、つまりは康熙二十一年（一六八二）の日付で署名がなされていることから、朱鶴齡が没したのは少なくともこの年を遡らないことを指摘して、没年を『清史列傳』にみえる康熙二十二年とみなしている。<sup>8</sup>

以上を念頭に、朱鶴齡の生没年について、試みに考察を加えたい。まず生年について、朱鶴齡の生年に関する資料は、管見の限り見当たらないが、朱鶴齡「傳家質言」にみえる年齢に関する記述は、やはり彼自ら筆記したものだけに、その信憑性は高いと推察する。ゆえに朱鶴齡の生年は萬曆三十六年（一六〇八）であると愚考する。

續いて没年について検討したい。この点については、まず周中孚（一七六八～一八三一）の言及を提示したい。周中孚は『詩經通義』について、朱鶴齡が康熙二十一年（一六八二）に附與した自跋が存在することを述べているのであるが、この記述も朱鶴齡の没年が同年（康熙二十一年）を遡らないことを意味するだろう。<sup>9</sup>

また、朱鶴齡は、互いに切磋琢磨しながら經學を研究しあつた陳啓源の著作『毛詩稽古編』の擲筆に多大な影響を及ぼしたのであるが、<sup>10</sup> それにまつわる様々な記録に朱鶴齡の没年を考える手掛かりが見受けられるため、以下、順を追って確認していきたい。

陳啓源『毛詩稽古編』は初稿・續稿・完成稿の順に成立したのであるが、うち、初稿が脱稿した際、「康熙十八年季秋朔日同學弟朱鶴齡撰」の署名とともに、朱鶴齡が序文を寄せている。朱鶴齡は陳啓源の要請に應え、この初稿に對して校正を施し、<sup>11</sup> 陳啓源は朱鶴齡の指摘を反映させた續稿を書き上げたのであるが、この續稿を完成稿へと改める過程に際し、頼りの朱鶴齡が既に没していたため、彼による校正を受けられなかったことを、次の様に述べている。

今復た再び藁を易ふるに、改正する所、又前に數倍す。就正の人を求めんと欲するも、長孺を九原より起こすこと能はず。（『毛詩稽古編』「陳啓源後序」）<sup>12</sup>

では、この續稿の成書年代について検討すると、陳啓源の弟子である趙嘉稷（生没年不詳）が康熙二十三年（一六八四）に『毛詩稽古編』を借抄したことについて次の様に述べている。

憶ふに甲子の歳、先生を城東の存耕堂に拜し、遂に先生の著す所の『毛詩稽古編』を請ひ、館を葉氏に假り、朝夕披玩し、手を釋くに忍びず。是の秋、稷、善書の人を訪れ、一本を鈔謄せしめ、先生即ち因りて其の誤りを校正す。『毛詩稽古編』「趙嘉稷序）」<sup>13</sup>

弟子に披露したというのだから、これはつまり未完成のものではなく定稿の状態にあった書物をみせて、更に借抄させたということである。康熙十八年（一六七九）に校正を得た初稿を、續稿として仕上げることなく、そのまま康熙二十三年（一六八四）まで置いておくとは考えにくく、ゆえに、康熙二十三年（一六八四）に借抄された原稿は續稿であると考えられる。この續稿を借抄させた後、陳啓源はその複製原稿の校正を端緒として、完成稿へと改稿するための作業を開始したことがこの一文から理解できるが、續稿の校正作業の前には朱鶴齡が没していたことが先述の陳啓源の言葉から確認できるため、朱鶴齡は遅くとも康熙二十三年（一六八四）の秋にはこの世を去っていたことが推定できる。

ゆえに、朱鶴齡の没年は康熙二十一年（一六八二）から康熙二十三年（一六八四）の間となることから、『清史列傳』にみえる、康熙二十二年（一六八三）に朱鶴齡が没したとする記事は信頼に値するものと思考する。

如上の考察から、朱鶴齡の生年は萬曆三十六年（一六〇八）、没年は康熙二十二年（一六八三）と結論づけたい。

### 三、朱鶴齡の著作について

朱鶴齡が非常に篤實な研究者であったことは先掲の通りであるが、彼は研究の成果を様々な形の著作として遺しており、その著作数は、一説に、四十を超えるとまでいわれている。<sup>14</sup> 執筆活動についてこのような傳承があることから、朱鶴齡が多作であったことや、彼の學問および著作が當時の學界で周知されていたことがうかがえよう。その眞偽については稿を改めるが、試みに先述の『清史稿』をみると、『愚庵詩文集』、『易廣義略』四卷、『尚書埤傳』十七卷、『詩經通義』二十卷、『春秋集說』二十二卷、『讀左日鈔』十四卷、『禹貢長箋』十二卷等の著作が実際に挙げられている。<sup>15</sup> 無論この中にも『易廣義略』や『春秋集說』のように、現在、既に散佚してしまつてその内容を吟味できないものもあるが、それでも彼の著作は相當数が現存している。

朱鶴齡の學術活動を研究するに当たり、本來そのいずれも検討を加えていかねばならないのであるが、拙稿ではまず、前節までに名の擧がった著作のうち、『杜工部集輯註』（『輯注杜工部集』）、『李義山詩集』（『李義山詩集箋注』）、『詩經通義』（『毛詩通義』『毛詩古義』）の三書を彼の代表的な著作として採り上げ、簡単にではあるが整理しておくこととする。

## ①『杜工部集輯註（輯註杜工部集）』

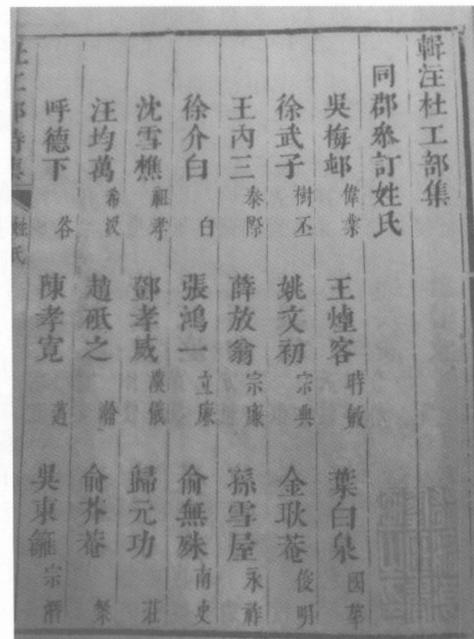
杜甫の詩文を網羅すべく編纂された書物である。拙稿では、国内に現存するもののうち、国立公文書館蔵本（昌平坂學問所舊蔵本）の康熙九年（一六七〇）刊本（表題『杜工部全集』、圖一）を参照した。卷頭に錢謙益（一五八二～一六六四）による序文を配し、以下、錢謙益との間における、杜詩とその注釋をめぐりやりとりといきさつに関する朱鶴齡の自述・朱鶴齡と同時代の文人である計東（一六二五～一六七六）が康熙九年（一六七〇）の冬に記した序文、朱鶴齡による自序、これまでの諸家が杜詩を編纂した際に附された序文・跋文を集めた「附録舊序」、「本傳」（『舊唐書』杜甫傳）、「墓誌銘」、「杜工部年譜」、「凡例」、これまでに杜詩を編集したり注釋を付けた諸家をまとめた「編註杜集姓氏」、同書の校訂に協力した學者を列記した「同郡參訂姓氏」、「目錄」（杜工部詩集卷一～二十、杜工部文集卷之一～二、杜工部集外詩）、本文の順に編集されている。

同書において留意すべきは、卷頭の序文にみえる朱鶴齡と錢謙益との間での杜詩に関するやりとりである。<sup>16</sup> 朱鶴齡は錢謙益のもとでその蔵書等を参照して研究を進め、やがてそれぞれが異なる編集方針によって杜詩に注釋を附した著作を上梓し、その内容の是非や優劣は世の識者に問うこととなった。朱鶴齡は錢謙益に禮を盡くして序文の執筆を依頼したのであるが、こうした點にも朱鶴齡の人となりがよく表れているといえよう。

また、「同郡參訂姓氏」にも注目したい。これは、同書の編集・校訂作業に助力した百九十七人の學者を列挙したものであるが、先述の友人・陳啓源は無論のこと、そこには當時の學界を代表する様々な人物の氏名がみえる。圖二はその冒頭部である。詩人として高名な、そして貳臣としても知られる吳偉業（一六〇九～一六七一）を筆頭に、例えば、歸莊（一六一三～一六七三）・陸世儀（一六一一～一六七一）・徐乾學（一六三二～一六九四）等、著名な學者が名を連ねており、その枚舉にはまさに暇が無いほどで、朱鶴齡の人脈の豊かさに驚くばかりである。



圖一、『杜工部全集』



圖二、同書「同郡參訂姓氏」

## ②『李義山詩集』（『李義山詩集箋注』）

朱鶴齡によって順治年間に編纂された李商隱の詩集。拙稿では国立公文書館蔵本（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）順治十六年（一六五九）刊本を参照した（圖三）。錢謙益による序文、次いで朱鶴齡により順治己亥（十六年）二月朔日に、猗蘭堂にて記された序文が附されている。以下、「李義山詩譜」、「附録書家詩評」、「凡例」、「目録」の順に續いて本文に至る。

うち凡例をみると、顧有孝（一六一九～一六八九）のほか、錢嘏（生没年不詳）・馮武（一六二七～？）・趙瀚（生没年不詳）・

沈自南（一六一二～一六六六）・張拱乾（一六一五～一六八八）・陳啓源の名を擧げて、その助力を得たことを特に記している。



圖三、『李義山詩集』（『李義山詩集箋注』）

## ③『詩經通義』（『毛詩通義』、『毛詩古義』）

『四庫全書』にも著録されている、朱鶴齡の代表的著作のひとつである。『毛詩通義』、『毛詩古義』とも呼稱されている。先掲の『清史稿』には「二十卷」と記載されているが、現存する『詩經通義』はすべて「十二卷」である。『四庫全書』所收本をはじめとして、碧琳琅館叢書本および芋園叢書本（碧琳琅館叢書本と同一の版本）などが現存する。これらの諸本についてその體裁や本文を比較すると、文章に多くの異同が確認できる。そのうち、『四庫全書』所收本は、『詩經』の詩編、つまりは經文をすべて掲載しているが、しかしながら他書はすべて詩篇・經文を掲載せずに注釋のみを提示しており、また注釋についても、『四庫全書』所收本では採用している注釋が脱落・疎漏していることがまある。したがって、同書の研究に際しては、第一に『四庫全書』所收本を用いて考察すべきと思考する。なお現在、『四庫全書』所收本は、『詩經』に關する諸本をまとめた『詩經要籍集成』に著録されており、『叢書集成續編』には芋園叢書本が、また近年出版された『廣州大典』には、碧琳琅館叢書本が著録されている。

『詩經通義』の成立・擱筆については、かつて拙論で述べたことがあるため、以下簡潔に提示しておきたい。<sup>17</sup>

朱鶴齡の門人である張尚瑗（一六五六～一七三一）は、雍正三年（一七二五）の『詩經通義』刊行に際して次のような序文を寄せている。

尚瑗の、教へを我が愚菴朱先生に受くるは、正に先生『通義』を輯譯するの日、其の時年未だ弱冠ならず。……庚子の冬の暮れ、瑗、豫章の院より歸り、……先生の兩孫に従ひ、『通義』の藏稿を借觀するに、五十年前の文を函れ點筆する情景恍然とし、牆を負ふの敬もて之が序を爲す。（『詩經通義原序』）<sup>18</sup>

朱鶴齡が『詩經通義』を執筆・編集していたのは、張尚瑗がまだ二十歳に満たない頃であったという。また、張尚瑗は庚子の年、つまりは康熙五十九年（一七二〇）に六十五歳であったと述べており、彼が朱鶴齡のもとで教えを受けていたのはその五十年前だということから、逆算すると康熙九年（一六七〇）となり、当時彼は十五歳であったこととなる。

この康熙九年（一六七〇）に、計東が朱鶴齡『杜工部詩集輯注』に序文を寄せているのであるが、そこにはすでに『詩經通義』および『禹貢長箋』の書名が確認できるため、先述の張尚瑗の言葉もあわせて推すに、『詩經通義』は康熙九年以前には、少なくともひとつの著作として成立していた、と考えられるだろう。<sup>\*19</sup>以後、朱鶴齡が世を去る前年と推察される康熙二十一年（一六八二）に朱鶴齡自らが跋文を附すことによって、『詩經通義』は擱筆された、と愚考する。

### 小結

以上、朱鶴齡の人物像とその著述活動について整理を試みた。ここまでみてきたように、彼の著作は散佚したものもあるが、その多くは現存しており、拙論でそれらすべてを紹介・整理することはできなかった。朱鶴齡はその執筆活動に際して、友人から助力や示唆を得ていたため、今後は、彼の交遊関係がその著作の成立にどのように影響したかを考えながら、朱鶴齡の學術活動の周邊をより丁寧に分析することが必要であろう。このことを新たな課題として、稿を改めて検討し、本稿では確認し得なかった様々な事実を明らかにしていきたい。

\*1 原文は次のとおりである。

朱鶴齡、字長孺、吳江人。明諸生。穎敏嗜學、嘗箋注杜甫・李商隱詩、盛行於世。鼎革後、屏居著述。晨夕一編、行不識途路、坐不知寒暑。人或謂之愚、遂自號愚菴。（『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」）

\*2 原文は次のとおりである。

初爲文章之學、及與顧炎武友、炎武以本原相勗、乃湛思覃力於經注疏及儒先理學。（同上）

\*3 原文は次のとおりである。

以朱子掇擊詩小序太過、與同縣陳啟源參考諸家說、兼用啟源說、疏通序義、撰詩經通義二十卷。（同上）

\*4 原文は次のとおりである。

年七十餘、卒。（同上）

\*5 原文は次のとおりである。

康熙二十二年卒、年七十八。（『清史列傳』卷六十八、「儒林傳下一」）

\*6 原文は次のとおりである。

甲申春、館金陵唐儀曹署……、遂決志、棄舉子業。時年三十七矣。（『愚菴小集』附録「傳家質言」）

\*7 鄧之誠『清詩紀事初編』四十六頁（上海：中華書局、一九六五年十一月）を参照されたい。

\*8 李光筠『朱鶴齡詩經通義研究』五十四～五十五頁（臺北：東吳大學碩士論文、一九八九年五月）を参照されたい。

\*9 周中孚『鄭堂讀書記』卷八、三十九頁上段右（北京：中華書局、『清人書目題跋叢

刊』第八輯、一九九三年一月、商務印書館『國學基本叢書』所收本の影印)に、『詩經通義』について次のような記録がみえる。

前有自序、後有自跋、稱壬戌、乃康熙二十一年、當屬愚菴晚年所作云。

\*10 拙著『陳啓源の詩經學』第一章(札幌:北海道大學出版會、北海道大學大学院文學研究科研究叢書十八、二〇一〇年三月)を参照されたい。

\*11 陳啓源『毛詩稽古編』「陳啓源後序」に次の様にみえる。

憶初脱稟時、以質於朱子長孺、賴其指摘、得以改正者數十條。(『毛詩稽古編』「陳啓源後序」)

\*12 原文は次のとおりである。

今復再易稟、所改正又數倍於前矣。欲求就正之人、不能起長孺於九原也。(同上)

\*13 原文は次のとおりである。

憶甲子歲、拜先生於城東之存耕堂、遂請先生所著之『毛詩稽古編』、假館於葉氏、朝夕披玩、不忍釋手。是秋、稷、訪善書人鈔謄一本、先生即因而校正其誤。(『毛詩稽古編』「趙嘉稷序」)

\*14 昭代叢書(一三四、補編・壬集)所收『愚菴雜著』に沈懋惠が附した跋文に、次の様にみえる。

吾邑朱愚菴先生、著書四十餘種。(『愚菴雜著』沈懋惠跋)

\*15 『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」朱鶴齡の項、以下の一文を参照されたい。

著愚庵詩文集。……以易理至宋儒已明、然『左傳』・『國語』所載占法、皆言象也、本義精矣、而多未備、撰『易廣義略』四卷。以蔡氏釋書未精、斟酌於漢學・宋學之間、撰『尚書埤傳』十七卷。以朱子掇擊詩小序太過、與同縣陳啟源參考諸家說、兼用啟源說、疏通序義、撰『詩經通義』二十卷。以『胡氏傳春秋』多偏見鑿說、乃合唐・宋以來諸儒之解、撰『春秋集說』二十二卷。又以杜氏注左傳未盡合、俗儒又以林氏注素之、詳證參考、撰『讀左日鈔』十四卷。又有『禹貢長箋』十二卷、作於胡渭『禹貢錙指』之前、雖不及渭書、而備論古今利害、旁引曲證、亦多創獲。(『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」)

\*16 先行研究として、長谷部剛氏の論考「杜詩解釋の多義性についての一考察——錢謙益と朱鶴齡の「注杜の争い」を中心として」(早稻田大學大学院文學研究科紀要第2分冊43號、早稻田大學大学院文學研究科編、一九九七年、百十九～百三十二頁)を参照されたい。

\*17 注10先掲の拙著、第三章を参照されたい。

\*18 原文は次のとおりである。

尚瑗之受教我愚菴朱先生、正先生輯撰『通義』之日、其時年未弱冠。……庚子冬暮、瑗自豫章院歸、……從先生兩孫、借觀『通義』藏稿、五十年前函丈點筆情景恍然、負牆敬爲之序。(張尚瑗「詩經通義原序」)

\*19 康熙九年(一六七〇)に書かれた計東の序文に、次のようにみえる。

長孺究老力學、博極群書、尤殫精經術、若『禹貢長箋』『毛詩通義』諸書、皆可竝懸日月、非僅籍『杜注』爲不朽也。(計東「杜工部詩集注序」)

※拙稿に関する資料調査は、平成25年度科學研究費補助金・若手研究(B)「明清における文學と經學の相關をめぐって——朱鶴齡の基礎的研究——」(課題番號2577013213)のもとで行われた。拙稿は當該研究計畫の研究成果の一部であることをここに付言する。

(えじりてつじょう 詩經學)